

〔資料紹介〕

森 鷗外、島崎藤村、和辻哲郎、安倍能成の書簡

―安田秀次郎宛の五通―

中田正心

目次

はじめに

森鷗外の書簡

島崎藤村の書簡

和辻哲郎の書簡

安倍能成の書簡

おわりに

はじめに

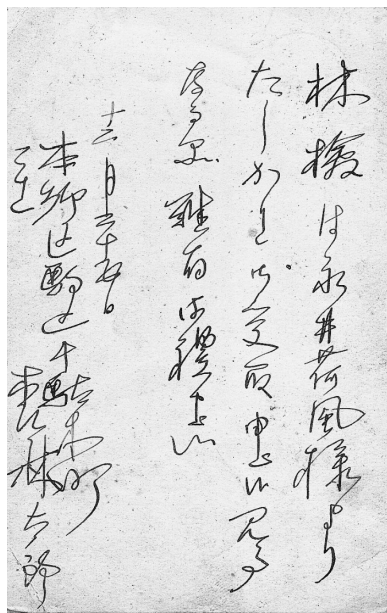
森鷗外、島崎藤村⁽¹⁾、和辻哲郎、安倍能成等から書信を受けた、青森の歌人安田秀次郎について叙述するには、筆者は全くその任にない。よって、ここでは、書簡の紹介のみについて責務を負うこととする。

安田秀次郎、明治十一年（一八七八）に青森県北津軽郡板柳村に生まれて、東奥義塾から東京専門学校（現早稲田大学）に進んだ。卒業後、郷里に帰り、りんご園を経営する兄のもとで、家業に従事しながら、蛇苺と号し、居宅を苺庵と称して、意欲的に詠歌活動をおこなった。が、しかし、大正十五年（一九二六）七月十二日に、昭和の到来を待たずして病死した。享年四十八歳であった。⁽²⁾

安田ははじめ、「鉄道唱歌」の作者大和田建樹に傾倒した。やがて、佐佐木信綱の機関誌「心の華」に属して、歌人として信綱の認めるところとなった。それでも、その後、雑誌「明星」に移り、与謝野鉄幹・晶子の指導を受けた。「明星」の廃刊にともない、雑誌「スバル」に変わったが、ここでは然したる実績をあげることも無く、故山の「東奥日報」を活躍の舞台とした。

安田は、大和田を板柳に招いて講習会を開催した。⁽³⁾それにまた、与謝野鉄幹と晶子を板柳に招請して、歌会や講習会を催した。⁽⁴⁾

また、夏目漱石⁽⁵⁾や和辻哲郎と交信をしたり、安倍能成などの中央の文化人を板柳に招聘して講演会を行うなど、地域社会に対する文化啓蒙活動にも熱心であった。



森 鷗外の書簡

(明治四十三年十二月二十五日)

【はがき】 サイズ：縦十四・一センチ、横八・九センチ

〈表書き〉 消印・駒込局 43.12.26 板柳局 43.12.27

青森県北津軽板柳村

安田秀次郎様

〈裏書き〉

林檎は永井荷風様より

たしかに御受取申上候見事

なる品難有御礼申上候

十二月二十五日

本郷区駒込千駄木町二十一

森 林太郎



島崎藤村の書簡

(大正三年正月十四日)

【絵はがき】サイズ：縦八・九センチ、横十四センチ

Paris の消印・1914.1.4

〈表書き〉

Via Siberie

Monsieur Yasuda.

Aomori

Japon.

日本、青森県、津軽郡

板柳

安田秀次郎様

行

御手紙によれば御地産の品

御心なかけられまわ々小包ににて御

送り下されしよしなつかしき賜

物にを接するの日も近きにあらんと

楽み居り申候



〈裏書き〉

遠き旅の記念としてこの葉書御納め御下度候

大正三年正月十四日 仏国巴里

ポオル、ロワイ

アルの宿

にて

島崎生



島崎藤村の書簡

(大正三年二月四日)

【封書】

《封筒》サイズ：縦九・八センチ、横十四・三センチ

Parisの消印 1914.2.4 青森・板柳消印 3.2.22

〈表書き〉

Via Siberie.

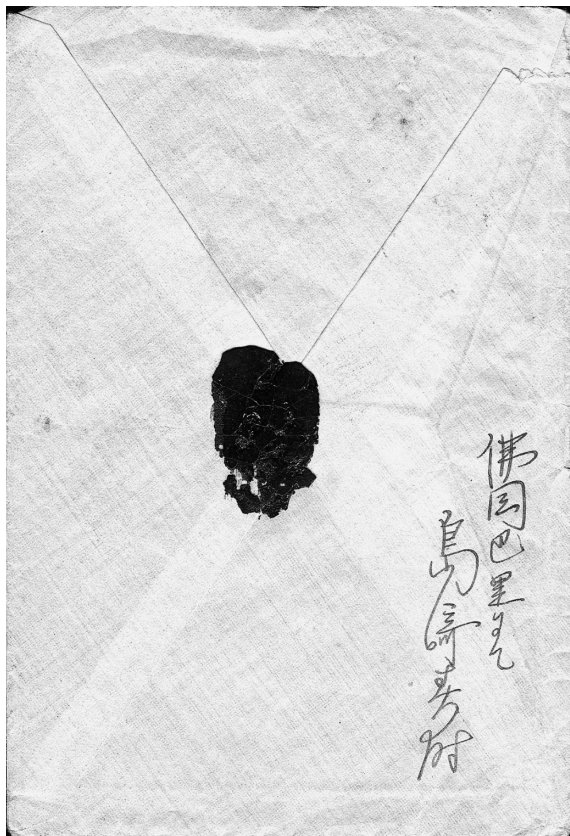
Monsieur H. Yasuda.

Aomori.

Japon.

日本、青森県 津軽郡、板柳

安田秀二郎様



〈裏書き〉

仏国巴里にて

島崎春樹

《便箋》サイズ：縦十八センチ、横二十
六・五センチ

便箋は両面を用いた一枚。

Chez Madame Simonet,
86, Boulevard Port Royal,
Paris.

安田秀二郎様

数日間インフルエンザの氣味にて臥床して
居りましたぬこの手紙を差上げるのも甚だ
延引しました先づその御託より申上ます

先日は実ふめづらき品々——羊羹、
すゞこ粕漬、鯛味噌、ウニ、数々小包ま
は恵贈下され御心つかひのほど
は禮を言ふ遠いところをわざわざ送り
下さるあの箱の中よりさまざまの味のものを
取出しました時は忘れ難き故郷の香を
かぐ心地が致しました殊々ウニは小生が好物

Chez Madame Simonet,

86, Boulevard Port Royal,

Paris.

安田秀二郎様

数日間インフルエンザの氣味にて臥床して
居りました為この手紙を差上げるのも甚だ
延引しました先づその御託より申上ます
先日は実ふめづらしき品々——羊羹、

すゞこ粕漬、鯛味噌、ウニ、数々小包にて
御恵贈下され御心つかひのほど厚く

御礼申上ます遠いところをわざわざ御送り

下さるあの箱の中よりさまざまの味のものを

取出しました時は忘れ難き故郷の香を

かぐ心地が致しました殊々ウニは小生が好物

の品は上陸して旅の憂々さを忘れず
 ある日この食堂へも頂戴せしウニを持つて
 参り露西亞や獨逸から勉強に来て居る
 同宿の年若き歐羅巴人の客も振舞ひまし
 中々これは実なエキゾチックな味とは思へども何分
 も吾儕は細いところまで賞味すること
 出来なくて残念なぞと申し居りました
 二月に入りましてから当地も寒氣ゆめ
 好き天氣が続いて居ます 志らく朝日
 への通信も休みまして書送つて当地
 の模様など読んで頂かうと思つて居ます
 巴里の客舎にて
 島崎春樹

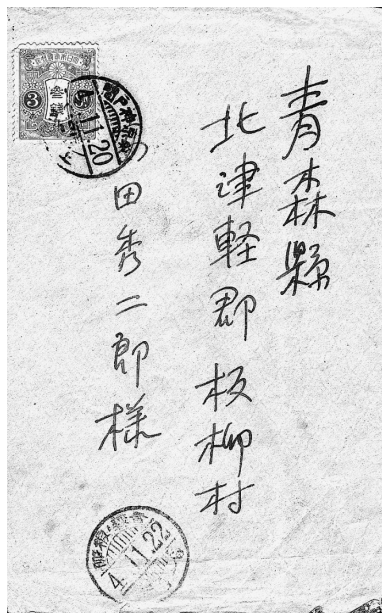
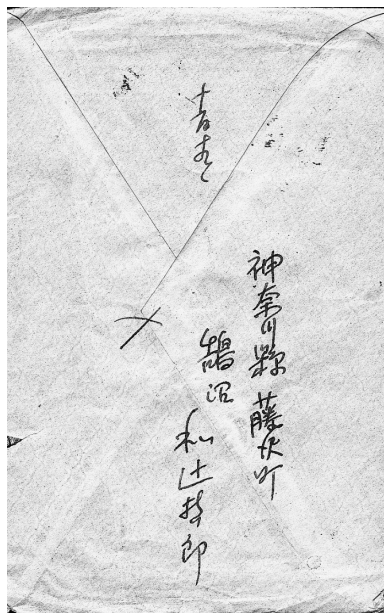
二月三日
 巴里の客舎より
 島崎春樹

二月三日

巴里の客舎にて

島崎春樹

の品 御蔭にて旅の憂々さを忘れず
 ある日この食堂へも頂戴せしウニを持つて
 参り露西亞や獨逸から勉強に来て居る
 同宿の年若き歐羅巴人の客も振舞ひまし
 中々これは実なエキゾチックな味とは思へども何分
 も吾儕は細いところまで賞味すること
 出来なくて残念なぞと申し居りました
 二月に入りましてから当地も寒氣ゆめ



和辻哲郎の書簡

(大正四年十一月十九日)

【封書】

《封筒》サイズ：縦十五・三センチ、横十センチ
消印・東京神戸間 4.11.20 青森板柳 4.11.22

《表書き》

青森県北津輕郡板柳村

安田秀二郎様

《裏書き》

神奈川県藤沢町

鶴沼

十一月十九日 和辻哲郎

お手紙と美しい林檎とが昨日届きました。わたくしお手紙を掛けて御送り下さった御好意を厚く感謝いたします。殊にあのやうな見事な林檎は当地では仲々手にはいりません。林檎は大好物ですから一層嬉しうに頂戴しました。私はこの月の始めから激烈な腹カタルを蒙って半月あまり寝て居りました。やつと一昨日あたりから少しづつ起きてゐられるやうになりました。回復期のせい、か、食べるものが非常に甘いのです。昨日も頂いた林檎を煮て貰つて食べました。何とも云へぬ好い味でした。

御地はどの辺にか一寸見当がつきませぬが、林檎畑などの打ち続いてゐる所を想像しますと、何となく新鮮な気持ちのする土地のやうに思われます。さういふ所を大地に親しみながら生の問題に沈潜して居られる御生活が大変なつかしく思はれます。私は中国の田舎に生れたもので、田や畑や農夫などとかかり親しみのあるものです。トルストイのものを読む時などには、具体的に

いろいろ反省を促されます。地を耕す生活が、語学の知識の切売をしたり、蕩樂の代償として歓迎せられる文字によつて糧

《便箋》洋紙二張 縦一九・六センチ 横二七センチ
 お手紙と美しい林檎とが昨日届きました。わたくしお手紙を掛けて御送り下さった御好意を厚く感謝いたします。殊にあのやうな見事な林檎は当地では仲々手にはいりません。林檎は大好物ですから一層嬉しうに頂戴しました。私はこの月の始めから激烈な腹カタルを蒙って半月あまり寝て居りました。やつと一昨日あたりから少しづつ起きてゐられるやうになりました。回復期のせい、か、食べるものが非常に甘いのです。昨日も頂いた林檎を煮て貰つて食べました。何とも云へぬ好い味でした。

御地はどの辺にか一寸見当がつきませぬが、林檎畑などの打ち続いてゐる所を想像しますと、何となく新鮮な気持ちのする土地のやうに思はれます。さういふ所で、大地に親しみながら生の問題に沈潜して居られる御生活が大変なつかしく思はれます。私は中国の田舎に生れたもので、田や畑や農夫などとかかり親しみのあるものです。トルストイのものを読む時などには、具体的に

いろいろ反省を促されます。地を耕す生活が、語学の知識の切売をしたり、蕩樂の代償として歓迎せられる文字によつて糧

を得たりする生活より、どれほど真実であるか解らないと思ひます。都会の生活は、ウツカリしてゐると、きつと淺薄な上ツ面ばかりの生活にあつたやうに思へます。勿論しつかりしてゐる人たちはそんなうちはないでせうけれど。

私はこの夏から鶴沼の田舎へ引込んで居ります。避暑地としての鶴沼からは半里ほど巨つた、近所々家のない淋しい所です。豆腐屋へも半里位はあります。東京へは週々一度か二度出ますが、何となく東京とは他人々なつた様々感じます。

私の作物々御注意下さるのは嬉しい御座います。何かお感じになつた事を御忠告下されば仕合せです。私は自分の意欲する所と表現し得た所とがあまりに巨つて居るので、ひどく苦しんで居ります。私は力一杯に努力してゐるのですが、未だく努力が足りないのです。

私は貴兄が生々の嚴肅から眼を背けずに、突き進まれることを祈ります。そして貴兄の運命の大きく高く開ける事を祈ります。

御礼 芳 女也

十九日朝

相州鶴沼より

哲 郎

安田秀二郎様

事はないでせうけれど。

私はこの夏から鶴沼の田舎へ引込んで居ります。避暑地としての鶴沼からは半里ほど巨つた、近所々家のない淋しい所です。豆腐屋へも半里位はあります。東京へは週々一度か二度出ますが、何となく東京とは他人々なつた様々感じます。

私の作物々御注意下さるのは嬉しい御座います。何かお感じになつた事を御忠告下されば仕合せです。私は自分の意欲する所と表現し得た所とがあまりに巨つて居るので、ひどく苦しんで居ります。私は力一杯に努力してゐるのですが、未だく努力が足りないのです。

私は貴兄が生々の嚴肅から眼を背けずに、突き進まれることを祈ります。そして貴兄の運命の大きく高く開ける事を祈ります。

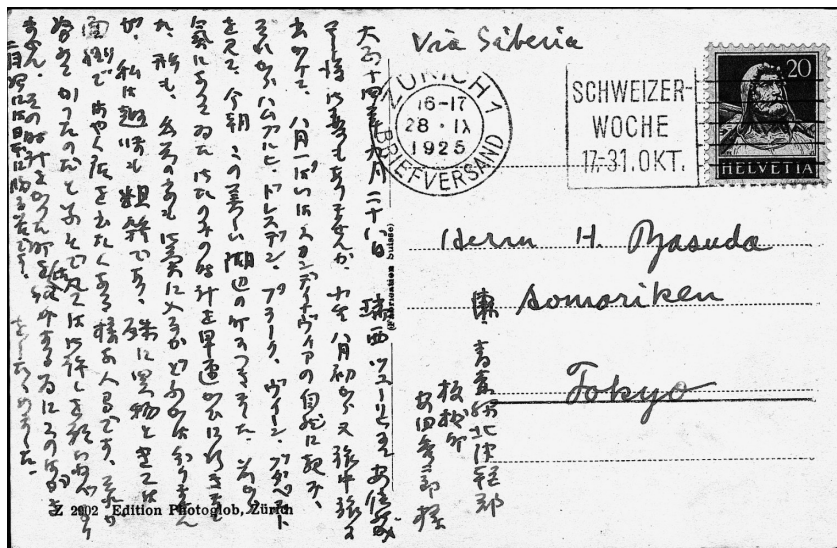
御礼 芳 右迄

十九日朝

相州鶴沼より

哲 郎

安田秀二郎様



安倍能成の書簡

(大正十四年九月二十八日)

【絵はがき】サイズ：縦九・一センチ、横十四センチ

消印・Zurich 1925. 1. 28

《表書き》

Via Siberia

Herru H. Yasuda

Aomoriken

Tokyo

青森県北津軽郡

板柳町

安田秀二郎様

大正十四年九月二十八日

瑞西ツューリヒにて 安倍能成

その後御変もありませんか。小生 八月初から又旅中旅に

出かけて、八月一ばいはスカンディナヴィアの自然に親み、

それからハムブルヒ、ドレスデン、プラーク、ヴィーン、ブダペスト

を見て、今朝この美しい湖辺の町々に行きました。前から

気になっていた御地⁽⁷⁾のみの時計を早速かひに行きました。形も玄刻⁽⁸⁾の字も御氣に入るかどふかは分りませぬ



が、私は趣味も粗雑であり、殊に買物ときては

面倒ではやく店を出たく^ななる様々^な人間です。それが

努めてかったのだといふことで凡ては御許しを願ハねバなり

ません。その時計をかった町を御紹介する為にこのはがき

二月始には日本に帰る筈です。をしたゝめました。

《裏面》

Zürich の市街の遠望の写真

おわりに

安田秀次郎の次男は、今は亡き佐藤陽吉（独往）氏である。その御令閨の佐藤都茂子（慧珍）女史が、現在、秀次郎宛の書状等を所蔵保管をなさつていらつしやる。この度、その中から、五通の書簡を公にすることをお許しくださった。

また、本学図書館事務課主任中村君枝女士には、安田秀次郎に関する資料の狎渉に多大なご尽力を賜った。ここに、衷心より謹んで、ご両人に厚く御礼申上げる次第。

〔註〕

（1）藤村自身が「島崎」と署名していることから、「崎」を用いた。

（2）工藤大成の歌集『楓村集』冬柏発行、昭和八年、三頁。与謝野寛の本名で序文を寄せて、「突如として安田君が没せられた時、自分達夫婦は愴然としてさながら弟の一人を失った如くに哀惜した」。また、この歌集の一五五―一六〇頁。与謝野寛は「涕淚集」と題して、「大正十五年七月十二日、安田秀次郎君にはかに病みてみまかりしを悼みて」十九首がある。

俄かにも君病むと聞き馳せゆけば三人（みたり）の医師（くすし）かほ曇りある
ただひと日逢はざりし閒にかくばかり面（おも）やつれせし君を見るかな
打つ脈のあるか無きかにおとろへて注射も今は君にかひ無し

せんやうも無げなる医師の私語（ささやき）を聞くに涙のただ落ちに落つ
目を閉づる今はのきはもわが友の心は常にかはらざりけり

事深く悟りきはめし君なれば遺す言葉も家に及ばず
病みたまふたよりを受けて帰れども臨終（いまは）に逢はず君が一（いち）の子

息絶えし君が枕にすすり泣く太郎の君を見るに堪へんや
再びは手にしがたしと涙ぐむ夫人の膝の君のまごろも
君なくてはかに暗き世に残るわが寂しさを誰れと語らん

相共に羅漢柏（ひば）の美山（みやま）を分けし君六日の後にすでに世の外（ほか）
この秋は甲田の山の花見んと契りしことも一昨日（をたとひ）にして

み柩を守りてあれば夏の夜のいと哀れにも白みわたれる
君は今久遠（くをん）の空に昇るらし火屋（ほや）を出づれば白き雲たつ

我が里に秀でし人を失ひぬ唯だわたくしになげくのみかは

なつかしきものとはなりぬ永遠（とことは）に君が眠れる奥津城（おくつき）どころ
入相の鐘のひびきにうなだれぬ君がめでつる白百合の花

葎庵（いちごあん）訪へど寂しや君は無し薔薇白百合の花は咲けども

死か夢かなしみまどふ聞もあらず三七日（みなぬか）とさへなりにけるかな

(3) 青山 栄編『板柳町史』津軽書房、昭和六十年十二月、一六四頁―一六五頁。

「明治三十六年八月には、国文学者・詩人の大和田建樹が、安田秀次郎・工藤大成・坂本元太郎・松山鉄三郎らに迎えられて来板した。昼は板柳小学校講堂で講演を行い、夜は有志のために歌会や謡曲会を開き、安田秀次郎宅へ二泊の後、岩本山神社へ参拝、浅虫に一泊して帰京したが、旧板柳小学校校歌は当時の作である」。

(4) 同書、一六八―一七〇頁。「大正十四年八月には、与謝野鉄幹、晶子夫妻が旧友であった安田秀次郎を訪問した。この時松山鉄三郎宅に五日間滞在し、万葉集と源氏物語の講習会を開き、多大の感銘を与えた」。

前掲書『楓村集』二頁。与謝野寛自身は序文で、「先生（工藤大成＝註筆者）の知を自分の辱くしたのは、大正十四年の九月、妻と共に十和田湖を経て津軽に遊び、板柳町の旧友安田秀次郎君外諸氏に迎へられて、松山鉄次郎氏のお宅に滞在した時が初めてであった」と、板柳訪問が九月であったとしている。

新聞進一「与謝野晶子」（『國文學』、「近代作家年譜集成」、昭和五十八年四月臨時増刊号）、學燈社、四十八頁。大正十四年（一九二五）の項に、「九月、東北旅行」と、同じく九月としている。

青山 栄・工藤国幹・館岡一郎『町を築いた人びと』板柳町教育委員会、昭和六三年三月、一〇八頁―一〇九頁。館岡一郎「一流文化人を招へい―文化の町の基礎を築く―」も、前掲書『板柳町史』の文を用いている。

(5) 夏目漱石から、安田秀次郎に発信した書簡五通を見ることが出来る。『漱石全集』岩波書店十七巻版、第十四巻の九三八・明治四十一年四月十七日付、九三九・明治四十一年四月十九日付。第十五巻の一二九一・明治四十四年三月十六日、一四四四・明治四十五年四月二十五日付、一四四七・明治四十五年四月二十八日付。

(6) 安倍能成『山中雜記』岩波書店、昭和十年(第三刷)、二三三―二三六頁。

〈旅信〉五に「奥羽線に乗り換へて淋しい川部の駅に下りたのは午後の三時半頃であつた。Y君に迎へられて、そば、降る中を荷馬車に痛められた道に車の歩みは遅かつた。(中略) Y君の家もやつぱりだつて、東北らしい感じの家の一つであつた。ここには一週間余も居ることになるであらう」(大正四年八月十日夜陸奥板柳にて) この「Y君」は、安田秀次郎であることは間違ひなからう。

次の、〈津軽半島より〉の冒頭は、「大正四年八月十五日、奥州板柳より」である。同八月十九日夜、北津軽郡中里村より「今日朝九時いよいよ板柳を立て、御所河原といふ町まで四里の間徒歩、五里を例のガタ馬車で四時頃にここへ著いた」。

安倍能成が板柳に、八月十日から十八日まで九泊した中で、安田秀次郎宅には、板柳到着の当夜だけだったのであろうか。安田秀次郎の熱心さから見て、彼は安倍能成に数泊をすすめ、そのように、もて成したとおもわれる。しかし、今、机上には左の書物のみにて、遺憾とする。

青山 栄編 前掲書、一六七頁。「明治四十三年十月には、作家の徳富蘆花が北海道漫遊の帰途、安田秀次郎宅を訪問した。リングの秋を賞観し、一夜有志一同と懇談会を開き、一泊して翌日帰京している」。「蘆花」の時は、徳富である。

伊藤整「第十一章 徳富健次郎と前田河広一郎」(『日本文壇史9・日露戦後の新文学』、講談社、一九九六年、一八五頁。

明治三十九年に入つて、「新紀元」の石川三四郎宛の書簡で「小生は堺兄に倣ふて『蘆花生』の号を廃めたり。今後は徳富健次郎を以てすべての場合に御呼び被下度候」。

「徳富蘆花年譜」(『泉鏡花 徳富蘆花集』(一) 現代日本文学全集9)、筑摩書房版、昭和四十二年、四三〇頁。

「明治四十三年九月、関寛翁を訪うべく、夫人及び鶴子を伴い、北海道に旅す」。なお、徳富健次郎が板柳を訪ねたのが、北海道からの帰路であったとすれば、明治四十三年で、『蘆花』の雅号をやめた後である。

青山 栄編同書「その翌年八月には、評論家・哲学者・教育者として有名な安倍能成が、安田秀次郎・工藤大成・松山鉄三郎・坂本元太郎らに招かれ来板した。この時、板柳小学校講堂で一週間にわたって哲学講習会を開き、松山鉄三郎宅に十日間滞在した。この講習会には、県内各地から、聴講者が集まり百数十名にもものぼったという」。

前に見たように、安倍能成は十日から十八日まで九泊し、十九日の朝に、板柳を離れている。それでも、「十日間滞在」に合わせるとして、十日、到着の夕食を松山宅が饗応したとしても、日数に無理がある。

代表者奈良岡雄康『わが板小―創立百周年記念誌』昭和四十八年十一月、二十四頁。青山 栄「老ゆるまでいとま無かりし―教育・文化のパイオニア工藤大成先生―」の一節に、「四十四年八月には安倍能成を迎えた。この時は板小講堂で一週間の哲学講習会を開いている。県内各地からの聴講者数百数十名にのぼり、森田重次郎（前代議士）など、真先に馳つけたひとりであった。森田先生は、板柳というところは昔から文化的なところであったと往時を感慨深げに語っている」。

清藤碌郎『津軽文士群』講談社、昭和五十四年、一八一頁。

「明治三十九年に、俳人河東碧梧桐が、東北行脚の途中ここに立ち寄っており、大正十四年には、与謝野寛・晶子夫妻が、板柳の有名な林檎園主安田家の息子で歌人でもある安田秀次郎の招きで滞在した。豪商松山家の招きで、古くは大和田建樹、徳富蘆花、阿倍能成などがここを訪れていて、板柳は文士とのかかわりの多いところである」。大和田建樹・徳富健次郎ともに安田秀次郎が招き、宿や信や次と饗宴をもつててなしているわけで、この記述は未整理で、誤解を招きやすい。

(7) ここは、用法上「此地」であろうが、文中の他の箇所の文字と照合すると、どうしても「御地」と判読をせざるをえない。

(8) 不詳。仮に「玄刻」としておく。年配の時計職人三人、それに、セイコー博物館に確かめたところ、文字盤を「クロエト」や「シロエト」、また、「ダイヤル」と呼称するという。しかし、この二字は、これらには該当しない。